

---

# 雪をすくう温かい手

てりこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪をすくつ温かい手

### 【Zコード】

Z7661F

### 【作者名】

てりこ

### 【あらすじ】

姉御肌の大学生、小雪こゆきはクリスマスを前に彼氏に振られてしまつた。心は未練たっぷりでも平然を装つていたが、ただ一人、久史の前では強がつてばかりもいられずひきこ……。「弱さからくる錯覚を恋だなんて思いたくない」

秋は物悲しい季節、別れの季節って言つよね。

別れと言えば春もそうだけど、卒業とかが絡んで、なんとなく温かい風も吹いてて、まだ未来ある別れっぽくて、わたしは嫌いじゃない。でも秋の別れって最悪。景色はさびしいし、風が冷たい。寒い日なんて木枯らしつぼいでしょ。冷たいよ。体が冷える上に心までいてつきそう。

「なんで、って、……うーん、小雪のこじ嫌いになつたわけじゃないけど。あえて言つなら“女性”として見れなくなつてつていうか田の前の男が、冷たい言葉を遠慮のからもなしに吐き出していく。申し訳なさそうに、頭なんて搔いて。

「判つたよ。もういい。じゃ、さよなら」

それ以上聞きたくないから、あっさりとさえざつてやつた。ふいと後ろ向いて、そのまま置き去りにしてやつた。

だからあいつは知らないね。わたしが泣いたなんて。本当はすぐり付いて「別れないでよ」って言いたかつたなんて。

でもサークルではきっとまた会うし、こじれたくない。別れはあつさりした方が、これからのために。

なんで、ふられた方がこんなこと気遣つてるんだろう? ううん、理由は判つてる。また復活しないか、なんて淡い期待を持つてるんだ、わたし。嫌いになつたんじゃないなら、そのうちまた、なんてね。

あああ、クリスマスの予定、空いちゃつたなあ。

家に帰つたらもつとさびしくなつた。だから、友達にいっせいにメール出した。誰かヒマな人いる? つて。

でもこういふときって、とことん間が悪い。みんな「ごめん。今日無理~」って。しょうがない。氣を紛らわせるためにゲームでもしようか。

いつもは楽しいはずのアクションゲーム。今日はぜんぜん身が入らないや。やーめた。テレビでも見よう。

適当にリモコンでチャンネルを変えていると、携帯にメールが着信した。

『ヒマです。当田に呼び出しなんて珍しいですね?』

あ、失恋の愚痴聞き犠牲者登場。ありがたく彼を呼び出すことにした。

あわれな犠牲者、遠藤久史くんと落ち合つたのは居酒屋のチュー（えんじゅうひき）ン店。

週末の夜とあって結構な賑わい。他の客は宴会やら打ち上げやらで盛り上がっている。いいなあ陽気に騒げて。

遠藤くんはわたしより一歳年下の二十歳。ずっと通つているサークルのメンバーの一人で、話が合つ人だ。といつても趣味の話くらいしかしたことないけれど。

ハンサム、とは言えないかもしないけど、人好きする顔だと思う。身長はわたしより十センチ弱高い。考えてみたら、横に並んで歩くにはけつこういいバランスだよね。

でもずっと友人で、恋愛感情を抱いたことはない。なんていうか、男女の仲になるより、友達でいるほうが楽な感じがして。彼氏、あ、もう元彼か、あいつと付き合つているときも結構気楽に話していたし。

「急に呼び出して『めんね~』

席に通されて、座つた瞬間に謝つておいた。だつてこれから愚痴大会だもんね。

「いいよ。暇だつたし」

にこやかな遠藤くん。……そんな顔されると、話しづらくなあ。ところがこっちの気遣いなど一蹴する目の前の友人。

「デート、ドタキャンされちゃった?」

「今日どじろか、未来永劫、キャンセルされちゃったよ」

あつけらかんと言つたつもりだつたけど、遠藤くんは「え？」と言つた後に心配そうな顔つきになっちゃつた。つらそうな顔していたのかなあ。

「別れちゃつたのか。……なんで？」

「ふられちゃつた。女として見れないんだって。まあしじうがないか、こんな性格だしさ。かわいげないよね～。だいたい、苗字がいけないわ。東郷<sup>とうごう</sup>なんて強そうな響きだしさ。名は体をあらわすつて、あつてるよな。ニックネームも『ゆきねえ』でしょ？ もうアネゴ肌バリバリで、さ」

一気にそこまで話して、悲しくなってきた。そんなわたしでも、あいつの前では女の子しているつて思つてた。そういうところを好きになつてくれたんだって。それなのに、否定されちゃつたよ。

あ、ああ。ダメだよ、こんなところで泣いたら。呼び出されて、

愚痴聞かされた上に泣かれちゃ遠藤くん迷惑だよ。

だつたら黙ればいいんだるつばび、ここで言葉切つちやつたら余計に泣けてきそうだし。

「でもさあ、何もこんな薄ら寒い季節に別れんでもことと思わへん？……あ、そうか、もうすぐわたしの誕生日だし十一月はクリスマスだし、きっとプレゼントとか面倒くくなつたんだ。だからこの時期に」

必死にこらえて、笑顔で話してたけど、もう限界。

ぱり、ぱり、涙が右目から溢れ出てきた。次の瞬間には左目からも。

「あ、あらり？ ひょっと、やだ。『メン。……何やつてんだろ、わたし……』

笑顔を顔に張り付かせながら、あたふたとハンカチを探すわたしの姿はたゞこつけいだろう。呆れちゃつたよね遠藤くん。

震える手でハンカチを出してきて田に押し当つた。しづらいくそのまま声を殺して涙した。

遠藤くんは何も言わない。あつと困つてゐるんだろうな。

「『メン。こんなやから、ふられるんだよね。らしくないよね』

そう言つて顔を上げた。怒つてるかなと思っていた遠藤くんは、

予想に反して心配そうに「ひちを見ていた。

「ゆきねえ、無理しなくていいよ」

優しさが、とっても心地よく感じた。だから余計に迷惑かけたくなかつた。こんな時に素直に泣かないのはやっぱりかわいげないんだろうけど。

「うう。もうこい。聞いてもうべ、ちょっと泣いたら、すつきりしけやつた」

「本当に?」

「ほんとほんと。それにさ、あのまま泣いてたら遠藤くんが誤解されちゃうよ。恋人の痴話喧嘩つて。そんなん嫌でしょ？」

茶化してやると、遠藤くんは苦笑いした。

「それは、……うん、そうやねえ……」

ほり、やっぱ迷惑じゃない。あいまいにしきやつてるのが優しい男たるところだけだ。

「つてことで、この話、おしまー。せつかく飲みにきたんだから楽しい話しよう？」

優しい友人は、わたしの言葉につなずいて笑つた。

結局、愚痴はちょっとの間だけで、その後一時間くらいは、いつものように趣味の話で盛り上がつた。

失恋の痛手の中にいるときでさえ、他人に氣を遣つわたつて、やつぱり名前とのおり強くて、姐御肌なんだなとつくづく思った。

ヤツにふられてからちょうど一週間後が次のサークルの活動日だ。この一週間、正直言つて空元氣だけでやり過ごしてきたつて感じで、まだ全然心の整理はついていないんだよね。

でもヤツのこと引きずってるから来ないんだ、なんて思われるのも悔しいから、行くことにした。

ヤツは、なんか普通に話し掛けてきたりで、何を考えているんだ

か判らない。全然わたしには未練がないってこと？まあそうでなければふつたりしないんだろうけど、ちょっととは気まずく思わないのかな。

何人かは、わたしとヤツが別れたかもって気づいたみたいで、「ソソリと聞いてきた人もいる。平氣なふりして「理由はあつちに聞いてよ」って話ふつてやつた。ちょっとは困れ。

でもヤツは、まったく困つている様子もなく「なんとなく」「などやり過ご」している。

なんとなくで別れられたのか、わたしは。  
むかつ腹がたつたので、トイレに立つた。

顔をペチペチと叩いて、気合の入れなおし。油断したらついにヤツを田で追つてしまつ。もちろんやり直したいけど、今そんなそぶりを見せちゃダメだつてことは、過去の失恋で経験済み。

元々化粧つ氣はそれほどないんだけど、泣かないためにと今日はちょっととがんばつてメイクしてきた。友達に言つたらきっと化粧の目的が違うとヤツ「ノミ」が飛んでくるんだろうな。何せここは大阪の大学。シシ「ノミ」ならまかせとき、つて子は、そじらへんに「ロロロロ」としてゐるし。

その、シシ「ノミ」の満載の気合メイクをちょっとと直して、みんなのところに戻ろうと思つた。

「で、実のところなんゆきねえと別れたん？」

廊下で、遠藤くんの声がする。思わずまたトイレにひっこんで聞き耳を立ててしまつわたしは悪い女だな。

「実はさ、新しい彼女ができる。ゆきねえは嫌いやないけど、彼女と比べたら色気なくて。だからまあ言つちやえれば乗り換えたつて」と

ヤツが笑いを混ぜて答えてる。

ああそういうこと。いいよ別に。女の子らしくない」とは自覚してる。それに関してはもつあきらめの境地といつか。「うちにも「非」はあるわけで。

微妙に一股かけられていた時期があるのは腹が立つナビ。

「ゆきねえだつて、十分女の子してると思つけどな」

遠藤くんがフォローしてくれてる。ありがと。やっぱり優しいよ

ね。

「え～？ ヒサ、ひょっとしてゆきねえのこと好き？ 今フリーやし狙つてみたら？ と言つても、ふられたつてのに、むっちゃサバサバしてる人やから手にわざと思つけどね。ま～がんばれよ」

かちん、ときた。

でもここで飛び出すのも気まずいかなと踏みどまる。盗み聞きはもつと気まずいんだけど……。

「おまえな、ゆきねえは……」

遠藤くんは怒つたような声で言いかけ、とめた。何を言いたかったんだろう。

「おまえさ、彼女のどこ見て付き合つてたん？」

氣を取り直したかのよつな遠藤くんの問いかけ。

「どー、って……。改めて聞かれると困るなあ。彼女から告つて来たわけやし、嫌いじやなかつたから。まあ、楽しかったよ。いい退屈しきのにほなつたかなあ」

…………最低。百年の恋もいつぺんに冷める言葉だ。それどころか腹が立つてきた。かわいさあまつて憎き言葉とはよく言つたものだ。

「サイテーだな、おまえ」

遠藤くんの声が、また怒つている。まるでわたしの心を代弁するみたいだ。

「あ、やつぱり好きなんやな～。そんなにムキになつて「ヤツは相変わらずへらへらと笑つてゐみたい。

もつ、我慢限界！」

飛び出せうとしたとき、鈍い音がして、また足を止めた。

「い……ついて！ なんだよ、殴ることないやつー！」

ヤツが怒鳴る。遠藤くん、あいつを殴つたんだ。

……なんか、不謹慎だけじ、うれしいと思つた。

「人の気持ち踏みにじつといて平氣な顔しているおまえが悪い。ゆきねえ、きっとおまえの今の言葉聞いたら、おんなじふうにしただろうな」

そのやり取りを最後に、遠藤くんが離れていく。あとには、そちらを蹴りまくつて怒りを発散しているヤツがいた。

こんなアホに心許してたんだわたし。がっかりだよ。

サークルの部屋に戻つたけど、とてもじゃないけど今日はこれ以上遊ぶ気はない。友達には「気分が悪くなつたから帰る」とだけ伝えて、荷物をまとめて部屋を出た。

それからしばらく、いらいらしたり、落ち込んだり、精神的に落ち着かなかつた。卒業論文やレポートの作成に忙しいという理由でサークルにも顔を出さないで、このままフローラウトかな、なんて思つていた。

遠藤くんとヤツとのやり取りはサークルの中でうわさになつたらしい。女友達がこつそり教えてくれた。なのでますます出づらくなつてしまつた。サークルのみんなは遠藤くんの言い分が正しつて言つてくれているみたいで、ヤツも参加しなくなつてきていたみたいだ。

日ごろの鬱憤の発散場所だと思つていたサークルの人間関係で、こんなことになつたのは悲しいけれど、しょうがないよね。

遠藤くんと会つて、あのときのことのお礼を言いたい。そんなふうに怒つてくれて、うれしかつたつて。でもやつぱり、今は無理っぽい。

女友達は、わたしが荒れているから慰めようとしてくれているのか。たまに遊びに連れ出してくれる。ああこいつ時に友情のありがたさを痛感する。

携帯にメールが着信した。また女友達からだと信じて疑つてなかつたので差出入の名前を見て驚いた。

遠藤くんだった。「今日ヒマなら会いませんか?」って。  
どうしよう。ヒマだけど……。でも何の用だろう?

たつぱり五分くらい悩んでから、返信。

「とりあえずヒマだよ。珍しいね近田に呼び出しなんて？」  
すぐにメールが返ってきた。「前の居酒屋に行こうとお誘  
いだった。

会えるんだ。……なんだかほつとじていて自分に気づいて、首を  
振った。

気にしているけど、これは恋じゃない。だってわたし、まだあ  
いつのこと、引きずっと。そんな時に優しくしてくれたから、ち  
ょっと甘えているだけ。

とにかく行かなきや。身支度して家を出た。

居酒屋の前に着くと、中から相変わらず陽気な騒ぎ声が聞こえて  
くる。まあ本来それが当たり前なわけで。

遠藤くんはわたしを見るにこつと笑った。いつもみんなと遊ん  
でいるときとおんなじ顔だ。とりあえず安心した。

中に入つて、席に通される。偶然にも、この前の同じところ。あ  
のときのことが思い出されてなんだか複雑。違う席がよかつた。い  
や、どうせなら違う店がよかつたのだがそれは考えないでおこつ。  
「じめんね急に呼び出して」

あの時とは逆で、遠藤くんから声がかかる。

「いいよ、どうせヒマだったし。で？　どうしたの？　今度は遠藤  
くんの愚痴大会かな？」

彼がいつもおなじ顔なので、わたしも調子を合わせてこいつと笑つ  
てやると、遠藤くんは笑いながら首を振つた。

「ゆきねえ、誕生日もつすぐだろ？　はい。これプレゼント

……へつ？

予想外の展開に固まってしまった。

「あ、あ～。ありがと～」

思考回路が復活したので、お礼を述べて受け取つた。どれくらい  
沈黙していたんだろう。遠藤くんがちょっと怪訝な顔をしてくるよ。

「あはは。誕生日なんか忘れてた~」

茶化して言つと、遠藤くんは「あひ」とこりよつな顔をした。  
ひょっとして、ヤシの「こと」を思こ出させてしまつたとでも思つて  
るのかもしれない。

うん。確かにそつだけど、なんていつか、未練じやなくてむかつ  
腹といふか。遠藤くんじやなくて、本当にわたしが一発殴つておけ  
ばよかつたつて思つてる。

あ、そういうや、この前のお礼……。でもこの話の流れでいきなり  
その話もないか。

「なんだろ？ 開けていい？」

とにかく今は暗い雰囲気にもつていきたくなかったし、実際、中  
身に興味があつたから聞いてみた。遠藤くんがうなずいたのを見て、  
包みを開けてみた。

……ゲームソフト。前から興味のあつたやつ。

うれしい。うれしいけど、女性への誕生日プレゼントとして、  
どうよ？まあしかし所詮は友達だしね。ちよつとは期待したんだ  
けど。

期待？ 期待つてなにを。だから、友達だよわたし達は。

などと瞬間にぐるぐると考えるわたしは、結構失礼なやつだと  
我ながら思つてしまつた。

「おお～、ほしかつたやつだ。ありがとう遠藤くん」

とこりこりとで、最初に感じた喜びを素直に表現してみた。

「あ、よかつた、あつてた」

遠藤くんが、にこりと笑う。わたしが、ちうつとだけ好きだとい  
つていたソフトのこと、一生懸命思い出してくれたんだね。改めて、  
彼の優しさを見た。

「覚えていてくれて、うれしいよ～。誕生日も、ゲームのことも」

「ゆきねえの誕生日つて、ぞろ田だから覚えやすいんだよね」  
照れたように遠藤くんが言つ。その表情に、どきつとした。

何をときめいてんだ。やっぱり人の優しさに耐性低くなつてるな、

わたし。

「そうだよね。丹も田も覚えやすいよね。わたしの名前ね、誕生日がちょうど小雪つて言ひ一十四節氣の田で、そこから取つてきただって」

弱さからくる錯覚を恋だなんて思いたくない。とにかく今は自分を立て直さないと。いつもの自分を取り戻すんだ。

「へえ、そうだったんだ。小雪つて名前、かわいい響きだよね」

つて、いきなり決心ぐじくようなこと言われたよ。

「名前はかわいい響きでも、苗字がね。東郷小雪つてアンバランスだと思うよ。もっぱら、苗字の力強さがわたしのシンボルだよね。……まあ名前まで力強かつたらそれこそ女捨てないといけないかも、だけど」

えへへ、と笑うと遠藤くんも笑つた。

「またゆきねえはそんなふうに言ひ。ゆきねえだって、女の子らしいよ」

「ありがと」

ちょっと、なに？ 期待するような」と次々言われりやつてるよ。こゝはまかしておかないと、錯覚を信じりやつよ。

「遠藤くんは？ 久史だよね」

「うん。『幾久しく』って意味をこめたつて。『し』は、同るつていうのと迷つたらしいけど」

「幾久しく。いつまでもつていう意味？」

「そうそう。人にいつまでも一緒にいたつて思われるような人になつてほしいんだつて」

「じゃあ、遠藤くんにぴったりだね。友達多いし」

「そうかな～」

うん。いつもやつて取り留めのない話して、楽しくしているのが今のがわたしにとって、一番の活力だ。

ありがとう遠藤くん。この恩は、いつかなんかの形で返さないとね。

楽しい時はあつと/or間に過ぎて、そろそろ家に帰らないといけない時間になつた。

「それじゃ、遠藤くん、プレゼントありがとう」

「ううん。気に入つてもらえてよかつたよ」

「楽しかつた。また会つてくれる?」

すらすらと出た言葉に、はつとなつた。

そうか、これ、やっぱりわたしの本音なんだ。遠藤くんと、もつと親しくなりたい。

自覚して、顔がほてつてきた。

「うん。また遊ぼう」

そんなわたしの心の変化はきつと伝わってないね。遠藤くんは軽くうなずいた。

それから、しばらぐの間は女友達よりも遠藤くんと遊ぶ機会が多くなつた。まあ遊ぶといっても、ちょっと大学の帰りにお茶したり、だけど。

なんとか、彼とこむととてもリラックスできるんだよね。だから、無理なく自分を取り戻すことができそうで。

遠藤くんはきっと、ふられたばつかの哀れな女に同情して付き合つてくれているんだろうな。だって、さり気なく「好きな子とかいたら、ちゃんとわたしの誘い断つてよ?」って聞いても、「ゆきねえが復活するまではお付き合いするよ」なんて言われたし。

好きな人、いるのかな? いくらなんでもそれだったらわたしの誘いは断るよね。こんな、カップルが生まれるチャンスな時期に、誤解されたくないだろうし。

まあいいや。とにかく今は、ちょっとでもたくさん会つて、楽しい時間をすごすんだ。

ということで今日も、大学の帰りに遠藤くんとお茶する約束になつていて。大学から繁華街までわりと近いので、ちょっと疲れた体もすぐにいすに落ち着けることができた。

取り留めのない話をしながら、窓の外を見るとすっかりクリスマスムード。さすが十一月半ばだけはある。ツリー、イルミネーション、ディスプレイの中もガラスにスプレーで描かれたイラストも、すべてがいやみなくらいにクリスマスだ。あと十日もすれば繁華街どこのかそこらへんカップルだらけだねきっと。

ちょっと、たみしいかな……。今のところ、遠藤くんとそんな雰囲気になれそうにないし。

「あ、……もうそろそろ出たほうがいいよね」

時計を見て、遠藤くんが気を遣つて言つてくれているので、うなずいた。

本当は、もうちょっと一緒にいたいんだけど。

……はつ。だめだめ。贅沢言つちや。いつじて会えてるだけでも幸せなんだよね。

心の中でひそかに自分に言つて聞かせながら、繁華街を抜けて駅へと向かつ。

住宅街のそばを歩いているときに、遠藤くんがぼそっとつぶやく。「それにしてもさ……、やっぱ十一月も半ばになると、どこもクリスマスマードだね」

「え？　あ、うん、そうだよね」

答えながら、なんかおかしくなつた。普通そつこつせりふはもつとそれじしく飾り付けてある場所で言うものじゃない？　一応、クリスマス用に電飾とか飾っている家もあるけど、全体的には結構殺風景だよここ。

でも笑つちゃ悪いので「まかすために付け足した。

「クリスマスか。今年はつまんない日になりそうだよ。イブなんて日曜日なのにね」

ま、でも、卒論とかで忙しいからいいか、と言いかけたが、その前に遠藤くんの信じられない一言が聞こえてきた。

「じゃ、二十四日は、一人で遊びに行こつか  
え？　今、なんて？　一人でつて、それって、デート？　イブに？」

でも待って、一十四日つて言つたよね。お互い独り身だし、わたしはふられたばかりだからって、同情票？

などと頭の中で考えながらも、口では即刻〇へ出してるわたしがいた。

どうして？ どうこいつもりで？ その一言が聞けなかつた。  
変に意識されるのがいやだつた。そう問い合わせ返して、改めて考えられて、やつぱりやめるといわれるのがいやだつた。会わないくらいなら、友達感覚でもいいから一緒にいたい。

わたし、遠藤くんが、すぐ好きなんだ。

クリスマスイブ当日まで、まあそれはいろいろと考えた。考えれば考えるほどに好きなんだと自覚しては舞い上がり、でもきっと遠藤くんはわたしのことを友達以上には思っていないだらうと考えては切なくなつて。

でも、これからだよね。なんたつて、気づいたばかりだもん。いい具合に仲良くやつてゐから、これからもつと距離を縮めていけばいいじゃない。

イブの朝、外に出ると、夜中に雪が降つたらしくて日陰にはまだ小さな雪の塊が残つている。ホワイトクリスマスと呼ぶには頼りない量だらうが、これだけでも結構喜んじゃうものなんだよね。カッフルは、ああ、早くその仲間入りがしたいよ。

さて、フレアのワンピースとコート、化粧もみよつとして、いつもよりはおめかし状態で出かけた。デート、と呼べるかどうかもなぞだけど、とりあえず京都の三条で映画を見ることになつていて。遠藤くんは長袖シャツとジーンズ、ハーフコートといづれ、いつも変わらない格好。まあそりやそうだよね。デートつていうより、休日の暇つぶしなんだらうから。

映画はアクションもので、カップルが好んで見に行くようなものじゃない。じつこいつどいつも、やっぱり友達としてしか見られてないな。さびしい。

でも十分に楽しめた。笑いあり、ハラハラドキドキのストーリーとアクションにすっかり引き込まれて、映画の後のお茶の席で、遠藤くんと大いに盛り上がることができた。

うん、今はやっぱり楽しけりやいいや。そのうが、ゆっくりと距離つめちゃうぞ。

喫茶店を出て、どこに行こうかという話になつた。

「とりあえず、人多いし、河原歩こうか」

遠藤くんが言う。確かに、大通りの歩道はいつもよりたくさんの人でごったがえしている。そろそろ夕暮れも近づいているとあって、カッブルや友人グループなどが浮かれた様子でゆっくりと足を進めている。

加茂川の河原は整備されてきたと言つても、結構歩きにくい地面だ。昨夜雪が降つたしぬかるんだり滑りやすかつたりするところがあるかもしれない。本当ならあんまり歩きたくないけど、人ごみが苦手なわたしはうなずいて返した。

では早速とばかりに河原へと向かう。

河原へ降りて、地面がすっかり乾いていることにほっとしたが次の瞬間、そうだった、と思い出す。ここって、カッブルの巣窟なんだよね。なぜか計つたわけでもないのに等間隔でカッブルが腰を下ろしている。川に向かって座つて、楽しそうに話をしていたり、人目をばかからずいちやいちやしてしたり。

「あ～。なんていうか。いつも以上に多いね～」

茶化して言う。てっきり、遠藤くんも笑つて返してくれるものだと思つてた。

なのに、急に歩くのがゆっくりになつたかと思つと、真剣な顔になつた。

え？ なに？ やっぱり後悔した？ 恋人でもないのに、一人で遊びに出るんじゃなかつたとか。やっぱりこれから二人で会うのはやめようとか、そんなふうに思つてる？

不安におののくわたしの顔をじつと見て、遠藤くんは、小さな声

で、言った。

「ゆきねえ……。ねれら、わやんとゆき合はない？」

「え。はい」

と即答で返事してから彼の言葉がじわりと胸に染み入つてくれる。  
はい？ ……これは夢？ それとも都合のいい聞き違い？  
でもそんな否定的な考えは、彼の笑顔が吹き飛ばした。

「あ～、よかつた……」

「え～。じつちこや、ありがとう。うれしいよ」

「ほんと？ いや、とにかく、よかつた～。あ～。むかへむかへ繋  
張した～」

そこまで喜んでもらえてとつともうれしいやら照れるやう。  
五十メートルくらいそんなやりとりを繰り返して、今度はじつ  
て好きになつたのかとか、いつぐらじに意識したのかとか、お互  
いに暴露大会。

なんだ、遠藤くんも、一人で会い始めたころから気になつてたん  
だ。ぜんぜん気づかなかつた。彼もわたしの気持ちの変化に気づか  
なかつたつて、お互い、鈍いよね。

「そうだ、あのね、いまさらだけど、わたしがふられたすぐ後、サ  
ークルであいつのこと殴つてくれたでしょ？ うれしかつたんだ、  
本当は。お礼言いたかったんだ。……ありがとう」

「あ、聞いてた？」

遠藤くんが照れている。

「うん。本当にうれしかつたんだよ。わたしの「ことじこまで怒つ  
てくれて。考えてみたら、それがあつたから遠藤くんのこと意識し  
たんだし……。でも、今日の約束のこと『一十四日』って言つたか  
ら、てつせつその気がないんだつて思つて気長に構えてたんだよ」  
「それは……。実は、あの約束を言い出すのだつてすごく緊張して  
て、クリスマスイブだなんて恥ずかしくて出でこなかつたんだ」  
照れ笑いする遠藤くん。ますます表情が崩れている。ああ、こん  
な顔してくれるんだ。うれしい。

ふと、遠藤くんが足を止める。彼の視線の先は、日陰になつて、すこしだけ雪が残っている。河原の端っこで、でも存在を主張するよつこ、白く輝いていた。

「雪。まだ残つてた」

遠藤くんはそう言つと、近寄つていつて雪をそつとすくつた。少し残つていなかつた雪は、彼の手の中でゅうくりと溶けていく。完全になくなつて、ただの水滴になつたところで、顔を上げると遠藤くんもわたしを見ていた。

「ゆきねえ。……こんなとき、なんて言つたらいいんだろう。えつと、これから、ようしく。……小雪」

照れた様子の遠藤くん。最後にわたしの名前を呼ぶ声は小さかつたけど、彼の気持ちは十分に伝わってきた。

だから、彼の手をぎゅっと握つて、うなずいた。

「うん。幾久しく、ね」

彼の名前の由来になぞらえて、でも重くならないよつこ[元]談めかして笑うと、彼もうれしそうに笑つた。

彼の手は、雪をすくつた後なのに、温かかった。

温かい、優しい手。

河原の隅にあつた雪のよつこ、縮こまつて、それでも誰かに気づいてもらいたいと思つてた、わたしをすくつてくれて、ありがとう。本格的に雪が降つたら、一人で雪だるま作りたいな、と思つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7661f/>

---

雪をすくう温かい手

2010年10月8日15時50分発行